
傭兵の代行者

七荻 剛亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵の代行者

【Nコード】

N8081X

【作者名】

七菰 剛亜

【あらすじ】

親バカな魔物四人に育てられたラギウス。

16歳の誕生日を迎えた朝、彼は初めての一人旅にでる。

目指すは徒歩二日の近所の街！

そこで冒険者ギルドに登録して帰るだけ……のはずだったのだが、そう簡単には帰れそうになく……。

主人公は最強ではありませんが、親バカ四人のせいでチート気味。

まだ予定段階ですがバトル、ギャグ、軽いハーレム要素ありのファンタジーになります。
読んで頂けたら幸いです。

始まりの朝

夢を見る。それも毎回同じ夢を。

訓練に疲れて、泥のように眠る時なんかいつもそうだ。

物心がついた頃には既に見るようになっていた、馴染み深く、それでいて馴れる事の無い夢。

目が覚めると、どんな夢だったのか思い出せない。

だからきつと、馴れる事なんて無いんだと思う。

ああ、またか。

そんな風に溜め息を吐いて、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を腕で乱暴に拭う。

その度に、いつ部屋に入ったのか、母さんが俺を抱きしめてくれる。

どうして俺が夢を見たのを知ってるのかはわからない。

母親の勘だというけど、実の母親じゃないのに分かるものなのだろうか？

いや、それ以前に、母さんは種族的に子供が作れないはずだ。

もしかしたら自分が知らないだけで、寝ている間に悲鳴でもあげているのかも知れない。

うわ、なんて迷惑な奴なんだ。

こんなんで一人旅なんてできるのか？

そんな事を考えながら、俺、ラギウス・ベルカントは16歳の誕生日の朝を迎えた。

第一話

服を着替えて部屋を出る。

幾つもの部屋の扉がある廊下を左に進み、階段を降りると、マスターが作ったのであろう朝食の匂いに腹がなる。

いい歳して、さっきまで母さんに抱きついていたくせに現金なもんだなあ、と苦笑してしまう。

階段を降りたそこは広い食堂兼酒場になっており、6人が座れるテーブルが6つ並んでいる。

知らない人が見れば、何処からどう見ても宿屋か酒場にしか見えないだろう。

「おはよう、ラギ」

「おはようございます」

「おう、起きたか」

その一角、カウンターの出入り口に近い、いつも食事の時に使うテーブルに母さん、先生、師匠が座っていた。

「おはよう母さん、先生、師匠」

朝の挨拶をしていつもの席に座る。

見ればテーブルには既に手付かずの朝食……サラダやスープが並び、三人ともお茶が半分以上減っている。

待たせてしまったかなとは思うが、口にするのは止めておいた。些細な事だが、わざわざ気を使わせる必要はない。

それよりも、

「なんか居づらい」

皆して俺を見るのは止めてもらいたい。

俺の左隣では母さん……二十代半ば程にしか見えない、思わず目を奪われるような大きな胸を持ち、赤い薄手のドレスを纏った美しいサキュバス、エリアーデが腰まである長い紫色の髪を弄りながらにこにここと。

正面では先生……俺の少し上くらいの年頃にしか見えない、青白くて眼鏡をした金髪の美しい青年、リッチのナハトがクスッと。

右斜め前では師匠……三十代半ば程の四角い顔に無精髭を生やし、額に赤い鉢巻きをしたガタイの良い赤髪の男、人狼のヴォルフガンクがにやにやと。

それぞれが笑みを浮かべながら俺の事を見ている。

……毎年の事だけど、どうにも対応に困る。

「いいじゃない、お誕生日なんだから。ほ~~~~っんと、子供が育つので早いわねえ」

そう言って俺に抱きついて頬擦りしてくる母さん。
因みに頬擦りはいつもの事である。
あと乳首つまむな。

「エリアーデの言う通りです。保護者である我々が祝いたい以上、ラギに拒否権はありません」

「ああ、ガキンちょは素直に喜んできゃあ良いんだよ」

「別に喜んでない訳じゃなけどさ」

乳首をつまむ母さんの手を払いつつ、抱き返しながらばやく。
もちろん嬉しい。嬉しいのだから、どうにも気恥ずかしい。
なんというか、このままだと一生子扱いされそうなのがする。

「はいはいはい、皆さん揃ったなら食事にしますぞ」

そう言ってカウンターの中からマスター……白髪をオールバックに固め、白いシャツに黒のベストを着たダンディーな、それでいて好好爺然とした微笑みを浮かべる白い口髭の老人が、両手に料理が

乗った大皿を持って出てきた。

因みにマスターの種族と名前は俺も知らない。

まあ一番古い記憶……十年以上前のマスターと顔が全く変わっていないので、たぶん人間ではないと思う。

「ラギさんももう16歳なんですから、いつまでも子供扱いでは可哀想ですぞ」

そう言ってマスターは、テーブルの真ん中に2つの大皿を置いた。

片方はソースで艶々と輝くチキンの丸焼き。

そしてもう片方は……、

「……………」

「やだ、可愛い……ッ！」

「ほう、これはなかなか」

「……………ジジイ、どの口で子供扱いは可哀想なんてほざきやがった」

二頭身にデフォルメされた俺の絵が描かれた大きなケーキ。
さらに絵の下の方には、

「「「ラギきゅん、お誕生日おめでとう……!」「」「」

と、書かれていた……というか、師匠以外の三人に言われた。

「それじゃあ、そろそろかしら……あむ」

皆で乾杯してマスターの料理を堪能した後、デザートとして目の前に差し出された大きなケーキを頬張っていると、ふいに母さんが切り出し、唇の端に付いていたクリームを舐めとられた。

まあ、これもいつもの事だ。

「……いつもながら引くぜ」

「いまさらですが少しは子離れしなさい」

「おやラギさん、まだクリームが付いておりますぞ？じゅるり……
どれ、私も」

「」「」「やめんかクソジジイ！！」「」「」

……………さて。

今さらだが、この世界では魔物と人間が共存しているのかといえ
ば、そんな事は無い。

むしろ完全に敵対関係にあるという方が正しいだろう。

他の大陸の事までは知らないが、少なくとも俺達が住んでいるパ
ルギア大陸ではそうだ。この大陸には国が四つあるが、どの国でも
魔物は討伐対象とされている。

では何故か、と問われたら、わからないとしか答えられない。

わかっているのは、幼い頃に捨てられたらしい俺は、変わり者の
四人に拾われ、16歳になる今日まで育てられてきたという事。

母さんには母親の愛情や温もり、魔法とは少し違う妖術や呪いの
技術を与えられた。

先生には魔法の使い方と言葉、計算や学問を教えられた。

師匠には体術や武器の扱い、旅の技術を叩き込まれた。

じ…マスターには料理や作法、文化や様々な知識を教授された。

あとは四人が傭兵として仕事を請け負っているらしいという事く
らいだ。

そして俺は傭兵稼業を手伝う許しを得る為に、今日から旅に出る。
…まあ旅といっても、片道二日の街に行つて冒険者ギルドに登録
してくるだけだが。

これは師匠の提案で、冒険者ギルドに登録しておけば色々と便利

らしいし、一人旅で見聞を広げる事を意図しての事らしい。

最初は四人とも普通の仕事に就いて欲しいと思っていたようなのだが、俺が何年もかけて説得した。

たまに仕事に行く家族を見送って、不安な中帰りを待つのはもう御免なのだ。待つくらいなら一緒に戦いたい。

そんな訳で今日から俺は旅に出る。この誕生日会の後すぐに出発だ。……本当は去年の予定だったけど、母さんが駄々をこねたから一年遅くなったんだけどな。

「……………では、まず私からすな」

一撃で岩をも砕く三人の拳でボコボコにされたマスターが、ベストの内側から茶色の布袋を取り出し、その中から四つの白い置物を出してテーブルに並べる。

「どうぞ、手に取ってみてください」

「これは？」

手を伸ばして置物の一つを掴む。チェスの駒と同じくらいの大きさだろうか？

固いけど軽く、円柱状の根元の部分以外は蝙蝠の翼を生やした女性性の形に造られて……いや、この形は一つだけで、よく見れば他の

はそれぞれ狼、ローブを纏った骸骨、人間の形のようなだ。

「代行者の神像と呼ばれるものです。それぞれに我々の力が宿っていて、危険な時や困った時、そして日常に至るまで、ラギさんを助けるでしょう。一応オリハルコン並に固いので壊れる心配もありません。ちなみに落としたり捨てたりしても必ず戻ってくるし、盗んだ人間は必ず謎の変死を遂げるというアフターサービス付きですぞ」

……後半だけ聞くと、それは下手したら呪われていると言っているのではなからうか？

「さらに就寝時には目を光らせて周囲を徘徊か……もとい警戒し、奇声や呪いの言葉で不審者を威嚇しつつ抹殺してくれますぞ！」

「まんま呪われてんじゃねえか！」

「さらにさらに！一人旅でさみしい時はお話相手にもなってくれますぞ！定期的に話し掛けないと血の涙を流しながら泣き叫んだり寝てる間に縛られてじっと見詰め続けたりしますがね！！」

「引つ込めジジイ！！」

とりあえずマスターの顔に全力で叩きつけてみた。

あ、あと母さんにペンダントとか師匠に剣とか先生に軽装鎧一式とか貰った。特に呪われているような物も無かった。やっぱ普通のプレゼントが一番だ。

「はあああゝ、行っちゃったわねえ……」

テーブルに突っ伏したエリアーデは盛大な溜め息を吐き、テーブルをガタガタと揺する。

街に無事に着くだろうか？怪我をしないだろうか？風邪を引かないだろうか？ご飯を自分で作れるだろうか？ちゃんと一人で寝て一人で起きられるだろうか？朝抱き締めてあげないで大丈夫だろうか？お小遣いはもう一年分ぐらい渡した方が良かっただろうか？男や女に襲われたりしないだろうか？避妊は大丈夫だろうか？やっぱりこっすり後を……

「落ち着きなさいエリアーデ、お茶がこぼれます。ちゃんと神像も装備も渡したし、ネフロなら片道二日です。何も無ければ、街で觀光をしたとしても一週間もあれば帰ってきますよ」

全く親バカなんだから。

そう言つて、ナハトは優雅にお茶を飲む。

だいたい神像を持たせた時点でもう何でもなるのだ。心配する必要はない。

「そんなのわかつてますう〜〜、母親が息子を心配するのは当たり前なんです〜〜、男には愛する息子を想う母親の気持ちなんか解らないんです〜〜っだ。それもこれもヴォルフのバカが余計なこと考えたのがいけないのよ」

余計な事。

それは一人旅の事はもちろん、一般人でも知っているような常識や知識の一部を意図的に教えない事だ。将来の事を考えて、自分で調べる事や情報を集める事の大切さを教えるというのが、エリアーデは断固として反対した。

情報も知識も自分達が教えれば良い。どの道ラギー一人で戦場に送り出したりなんてさせる気はない。

そう主張するエリアーデを他の三人が宥めすかしてなんとか了承させたが、やはり今でも納得できない。

「大体ね、何も無ければって、本当に何も無いと思うわけ!？」

鉄や鋼より数段硬いハルバンド鋼で補強されたテーブルをバンバン叩いて壊しかけているエリアーデの問い掛けにナハトが苦笑する。

「もちろん思つてませんよ?きつと大変な事になるでしょうね」

あの子の事だ、きつとんでもない事に巻き込まれるだろう……ましてや決戦迷宮なんですからね、と心の中で付け足す。

「それでも神像があれば大丈夫ですよ。……きっと驚くでしょうねえ」

驚愕するラギの顔を想像して、ナハトがクククツと黒い笑みを漏らす。

「ふんっ、全部あのバカが………あれ？二人は何処に行ったのよ？」

「二人なら森の出口までこっそりつけてくるって、さっき出て行きましたよ？」

「……あの駄犬とクソジジイ……ッ！抜け駆けしやがったわね！」

ナハトは扉を粉碎して飛び出して行くエリアーデの騒々しさに眉をしかめ、溜め息を漏らす。

「まったく、ここには親バカしか居ないんですか」

そういつて懷から掌大の水晶玉を取り出して、僅かに魔力を込めてじっと凝視すると、水晶に森の中を歩くラギウスの姿がうつる。

「わざわざ行かなくても、こうすればどの角度からだって見守れるのに」

水晶玉越しに生徒兼息子を見詰め、優しく微笑むナハト。

やはりここには親バカしかいないのだった。

第二話

「今日も良い天気だねえ」

雲一つない青空を見上げ、んーっと伸びをする。
皆に見送られる中、森の中にある家を出て早一日。

特にハブニングもなく、森を抜けて街道を歩き、順調に進んだ所で日が暮れたので野宿をして、朝になったら干し肉やパンで簡単に朝食を済ませた。

いつもの夢を見る事もなく、例の神像が本当に目を光らせて周囲を見張ってくれたのでゆっくり休む事が出来のだ。

……… 近くに白目を剥いて泡を吹くゴブリンの死体を見た時は本気でビビったけど。

最初は呪われてるんじゃないかと思ったけど、もしかしたら本当に凄い物なんじゃないだろうか？

正直に言えば初めての一人旅に不安があつたし、野宿の時はろくに眠れないんじゃないかと思ってたから凄くありがたい。

試しに布袋に入れずに歩いてみると、俺の前後左右を囲むように空中に浮き、そのまま一定の距離を維持して俺の歩く速度に合わせて動いてくれる。護衛という事なのだろう。

「うーん、なんて頼もしいんだ」

もう一人旅とは言えないような気もするが。

一つ一つ形が違うし、名前を付けるべきだろうか？

そういえばマスターがそれぞれの力が宿ってるって言ってたし、皆を呼ぶように呼べば良いか。

そんな感じでたまに頬擦り（？）してくる神像を撫でてやったりしながら街道を歩く。

その異変に気付いたのは、可愛い奴等め！と両肩に四体の神像を乗せて撫でながら歩いている時の事だった。

「人の声…？」

一瞬空耳かと思ったが、どうやらそうじゃないらしい。

周囲を見回せば街道の周りは平原が広がり、少し離れた所に林があるのみだ。

「あそこか」

俺は街道を逸れ、林の中へと走る。

こちらの意思を汲み取ってくれたのか、師匠の神像が声がしたと思われる方向へ先行し、他の神像達は走る俺の周りを旋回する。

「シャアアアアッ！」

甲高い耳障りな奇声と硬いもの同士がぶつかり合う金属音。
どうやら間に合ったらしいと判断した俺は、木の影に隠れて様子を窺う。

「くっ、この……！」

林の中、少し開けた場所にいたのは、五匹のゴブリンと戦う小柄な少女だった。

素早い動きで囲まれないように戦ってはいるが、牽制しつつ囲もうとするゴブリン……ボロボロの布切れを腰に巻いてナイフを持った灰色の醜い魔物を相手に攻めあぐねている。

肩と胸、肘や膝やだけを守るプロテクターとナイフという身軽な装備。そしてゴブリンの足下に弓と矢の束が入った矢筒が落ちているのを見るに、普段は距離をとって戦うのが主体で接近戦は苦手なのだろう。

「どうしたもんな……」

ゴブリン程度ならどうとでもなるが、彼女が何者なのかわからない。極端な話、盗賊の類이었다らゴブリンを倒して助けた途端に後ろから刺されるかもしれない。

様子を見るべきだろうか？

そう考えた俺は少女の動きを観察するが、少女の顔が見えた瞬

間に硬直する。

めちやくちゃ可愛い。

うわ！うわ！うわ！どうしょ！やべえよ可愛いよ！

母さんで美人には見慣れてるつもりだったけど、母さんとは全くタイプが違う美少女だ。

「うつし！」

もう盗賊とか関係ねえや。

そうと決まれば急いで助けねば。

美少女は世界の宝です。

「母さんとマスターはあの娘を、先生と師匠は俺の援護を！」

剣を腰のベルトに固定した鞘から抜き払い、神像達に指示を出しながら、少女に集中して俺に気づかないゴブリンに向かって走り出す。

走る俺の足音に振り返ったゴブリンの首を、横風ぎの一撃で切り飛ばす。

骨すら大した手応えも無く切り飛ばした剣の切れ味に、俺は思わず目を見開く。

師匠が昔使っていたという剣……銘は確か、マーシェニクス。飾り気の無い、ごく普通の剣に見えるようにしたというそれは、

今までの訓練に使ったどの剣よりも手にしっくりくる。

いきなり現れて仲間の首をはねた俺に動揺するゴブリン達。

マーシェニクスを大きく振りかぶり、近くにいた一匹を脳天から真つ二つに斬り裂く。

「マーシェニクス!!」

離れた位置にいるゴブリンに向けて振るうと同時に放ったそれは、師匠に教わった剣の名前にして魔法の言葉。

使い手の望む形状に一瞬で変化するという千貌の剣。

数十もの刃が連なる事で構成された、鞭のようにうねりしなり、何処までも延び、進路上の全てを貫きズタズタに引き裂く連接蛇腹剣。

それはゴブリンの心臓を貫き、俺の手首と腕の動きに従ってゴブリンの全身を瞬時にスライスする。

凄え、凄えよ師匠!

訓練で使っていた剣よりも桁違いに扱い易い!

神像といい、この剣といい、本当に俺みたいな未熟者が貰って良かったのだろうか?

……いや、逆に言えば、まだまだそれだけ未熟で不安という事か。いいさ、装備に頼りきらず、もっともっと強くなってみせるさ!

三匹を片付けた俺は、残る二匹のゴブリンに目を向ける。

「キシヤアアアッ！」

「ギ、ギギイイ、キシヤア！」

耳障りな奇声をあげるゴブリン。

一匹は恐れをなして背を向けて逃げ出し、一匹は呆然とする少女に襲い掛かる。

「危ない！」

「……っ！？」

少女がゴブリンに気付くが、遅い！

間に合うか！？

連接蛇腹剣を振りながらそう思った瞬間、俺の刃がゴブリンに届くより早く、ゴブリンのナイフが少女に届くよりなお早く。

マスターの神像がナイフに飛来し、ナイフをゴブリンの手ごとグシャリと粉碎する。

「……………！？」

そしてゴブリンが悲鳴をあげる前に、母さんの神像の目が妖しい光を放ち、強烈な衝撃波でゴブリンを吹き飛ばす。

ゴブリンは全身の骨を砕かれ、吹き飛ばされた先で木に叩きつけられて哀れな肉塊と化した。

……………これ絶対俺より強いよなあ。

ふと最後の一匹が逃げた方向を見れば、先生と師匠の神像が戻ってくるのが見える。

きつと俺の不始末を処理してくれたのだろう。

ヤバイ。便利とかそんなレベルじゃない。

これはちよつと本気で頑張らないと、強くなるチャンスまで奪われてしまう。

「…………マーシェニクス」

そんな事を考えながら、俺はマーシェニクスを普通の剣の状態に戻すのだった。

「助けてくれて、本当にありがとございました！」

しばらく呆然としていたが、事態がようやく理解できたらしい少

女が何度とペコペコと頭を下げる。

こうして近くで見れば、大きめの瞳と幼さが残る輪郭が小動物的で、ぎゅゅと抱き締めたくなるような少女だ。

小柄で細いが不健康な印象は無く、むしろしなやかで張りの有る四肢は猫科のそれを彷彿とさせる。

肩口で揃えた藍色の髪も活動的な印象の少女によく似合っていると思う。

そしてなにより、上半身は半袖の服にプロテクターを装備しているのだが、下半身はデニム生地 of 短いズボンにブーツと膝当てを装備しているだけなので、形の良い白い太股が丸見えなので非常に目の毒だじゅるり。

いかん、マジで洒落にならんくらい可愛いぞ。

「僕、ヒースって言います。ここにはギルドの依頼で薬の材料を取りに来たんですけど、気付いたら囲まれちゃって……本当にありがとうございました！」

「いや、偶然通り掛かっただけだし、そんな大袈裟にしないでくれ」

正直な話、むさい男だったら助けなかったかもしれないし。

「いいえ、お兄さんがいなかったらどうなった事か……あの、もし良かったお名前を教えてください！」

「ラギウスだ。ヒースはこの辺りに住んでるのか？ネフロに行きたいんだが、どっちに行けば良いかな？」

林の中を走ってゴブリンと戦ったせいで、方向がさっぱり分からん。

「ネフロに行くんですか？それなら僕もネフロのギルドに帰る所だし、一緒に行きませんか？」

「ヒースはネフロに住んでるのか？じゃあ道案内を頼んでも良いかな？」

「はい、任せてください！」

そう言っただけでヒースはにっこりと花が咲くような笑顔で胸を張る。

……うん、ぺったんこな胸も全体のバランスを考えると問題無さそうだな。

第三話（前書き）

誤字脱字がありましたら教えて頂けると幸いです。
なお、文章力の欠如は仕様ですぞ。

第三話

「それじゃあ冒険者ギルドはまだ未登録なんですか？」

「ああ、それどころか一人旅も初めてなんだ」

ヒースを助けて数時間、ときおり休憩を挟みつつ、俺達はお互いの事を話しながらネフロへ通じる街道を歩いていた。

たまに商人の馬車や、他の冒険者や旅人とすれ違うが、あまり警戒した様子がないのを見るに、この辺りは治安が良いのかもしれない。

ちなみにヒースは俺と同じ年で、まだ駆け出しの探索者らしい。

この世界には迷宮と呼ばれる謎のダンジョンがある。

何のために誰が作ったのかは不明だが、その中には魔物が徘徊していたり罠が設置されていたりするが、その奥には宝が眠っているという。

そんな迷宮や遺跡での探索を中心に活動しているのが探索者だ。

といっても探索者だって旅をして普通にギルドなんかで依頼を受けるし、冒険者だって迷宮や遺跡に入るんだから、俺から見れば同じようなもんだが。まあ求められるスキルが少し違うのだろう。

ヒースが教えてくれたのだが冒険者ギルドは国営らしく、無料で

所属・登録できるらしい。

冒険者ギルドは魔物討伐や素材調達、商人や旅人の護衛等が依頼の中心なのだが、その一方で探索者には迷宮や遺跡内の探索や罠の解除等も依頼される。

新しく発見された迷宮は危険な罠が多く、ギルドの要請で集まった一流の探索者達による調査隊の後で他の探索者や冒険者が入るのが一般的だという。もちろん調査隊より先に入っても問題ないが、ほとんど自殺行為とみなされているそうだ。

もちろん新しい迷宮がそこらじゅうに有る訳じゃないし、一流の探索者ばかりじゃないので、探索者も普段は冒険者と同じ様な依頼を受けているんだとか。

「ネフロの近くにも迷宮って有るのか？」

街の近くに有るなら探索もし尽されているだろうし、軽く中の雰囲気を見ていくのも良いかもしれない。

「有りますよ、街の中に」

「……………街の中？」

怪訝な顔をしていたのか、俺の顔を見てヒースがクスツと笑う。

「ネフロの街に有るのは決戦迷宮って呼ばれてる迷宮なんです」

決戦、迷宮？

「また物騒な名前だな。普通の迷宮とどう違うんだ？」

「決戦迷宮っていうのは、昔、戦いの神パラムクルスを中心に、神々が邪神達と戦ったっていう伝説があるんです。だから決戦迷宮って名前がついたんです」

ヒースの説明によるとこうだ。

大昔、今の信仰されている神々と対立する悪しき神々との戦いがあり、その最終決戦が行われたのがネフロにある決戦迷宮らしい。他の迷宮との違いは、全階層がだだっ広いホール状の空間になっており、階層毎に全く違う環境で、例えば、雪が降り積もり吹雪が吹き荒ぶ階層かと思えば、一つ下は灼熱の砂漠のような階層だったりして、各階層で全く違う魔物が出現する事。

そんな事もあって、この決戦迷宮は各階層が違う空間に繋がっているんじゃないかと言われている。

そしてこの迷宮が街の中にある理由は二つ。

一つは罠が少ないので多くの冒険者が自分の力を試す為と、迷宮の奥に眠るという宝を求めて訪れ、その冒険者を目当てに商人達が集まって自然と街になったのだ。

そしてもう一つは、ネフロ自体が防壁としての役割を成している事。

通常、迷宮から魔物が出てくる事は無い。

しかし街ができて以来、この決戦迷宮では二百年の間に強力な魔物が三回も這い出しているのだという。

一回目と二回目は魔物の大群を率いて現れ、そして四十年前の三回目は強大な魔物が一匹で現れたらしい。

今では一回目を教訓にし、国中に魔物が散らばらないよう、ネフロ内部で包囲殲滅できるように防壁や防衛隊が配備されているわけだ。

……もつとも、二回目も三回目も街は壊滅的な被害を受けたい。しかも一回目と二回目は魔物の首魁を、三回目はその一匹すらも倒せずに取り逃がしたというのだから困ったものだ。

そしてその魔物による蹂躪ぶりから、迷宮から魔物が現れるのを『侵攻』と呼ぶらしい。

「いつそ封印して塞いじまえば良いのに」

「そんな事したら、街が潰れちゃいますよ」

俺の事に苦笑したヒースが、あ！と声をあげ、前を指差す。

「見えてきました、あれがネフロです」

ヒースが指差した先、そこには確かに高い外壁に覆われた大きな街、通称、迷宮都市ネフロがあった。

ネフロには広大な街を囲む外壁と、街の北側にある迷宮を囲む内壁という二つの防壁がある。

街の出入り口の門は東西と南の三ヶ所にあり、それぞれに警備兵の詰め所もあって不審者が出入りしないか常に見張りがあるが、街の規模も大きく迷宮も有るので人通りが凄まじく多い。その為よっぽど怪しい素振りを見せない限り、簡単なチェック等だけで半ばフリーパス状態だ。

そんなんで大丈夫かとも思うが、ネフロには腕利きの冒険者や大勢の警備兵兼防衛隊がいるし、暴れたりして街の中にいる商人達を敵にまわせば大変な事になるらしく、治安は安定しているらしい。

俺はチェックを待つ行列に並びながら外壁を見る。

高さは8メートルくらいだろうか？高さはもちろん、分厚く外壁の上には何人もの見張りの兵士が配備されている。

俺は頭の中で部屋に飾ってあった地図を思い浮かべた。

少し離れてはいるが、ネフロから北東に向かえば隣国のザブツベルクとの国境がある。迷宮からの侵攻に備えているという事だが、実際には有事の際の拠点としても想定されているのだろう。中々に防衛力が高そうだ。

「……街の作りを把握しておいて損は無さそうだな。」

将来傭兵になるなら、攻める側か守る側かは別として、また来る事になるかもしれない。

「はい？」

「いや、腹減ったなあって言うただけ。おっ、もう次だぞ」

まあ楽しく観光でもさせてもらおうとしようか。

「凄いなこりゃ」

何が凄いつて人口密度が半端ねえ。

道には石畳が敷かれ、そして道の真ん中を空けるように食べ物や道具を売る屋台や露店商がズラ〜〜〜〜と並んでいる。

両親の間で手を引かれて目を輝かせる小さな子供、値段交渉をする貴族か商人風の身なりの良い男、ベンチに座って何かを話している冒険者達、楽器を鳴らす吟遊詩人や大道芸と小銭を投げる見物客達。

まるでお祭り騒ぎだな。気を付けないと、うっかりはぐれてしまいそうだな。

大きな街に来るのは初めてだが、他の街もこんなに賑やかなのだろうか？というか、此処はいつもこんなのだろうか？

今なら師匠が一人旅をさせようとした理由がわかる。いくら口で人が沢山いると言われても、これを見なかったらピンと来なかっただろう。

自分がどれだけ世間知らずなのか思い知らされるな。

「この辺りじゃ一番大きな街ですからね。人も物と沢山集まるんです」

「家と家の周りの森しか見た事がない人間には衝撃的だな」

ヒースには俺が母さん達四人に拾われて育てられた事は話してある。流石に育ての親が四人とも魔物とは教えていないが。あ、あと神像は布袋に仕舞ってある。俺にはあの神像の価値がわからないし、無意味に目立つ必要は無いだろう。

「これからどうしますか？ギルド、宿屋、食事……何処から行きますか？」

「ヒースはギルドの依頼を受けてたんだろ？俺も登録したいし、ちようど良いから案内してくれるか？」

「わかりました、じゃあギルドに行きましょう」

これだけ広くて人が多いと簡単に迷いそうだ。迷子にならないようにしないとな。

「おつと悪い！」

ギルドに向かっている最中、ヒースに色々聞いてあっちこっちをキョロキョロしていたからか、正面から来た男とぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？」

「ああ、なんでもない」

ぶつかった相手も行ってしまったし、もう少し気を付けよう。

「しかし凄い人通りだな、いつもこんなのか？」

「いえ、いつもはここまで多くないんですが……僕もここに來て一ヶ月くらいだから知らないけど、何かあるのかもかもしれませんね」

なるほど、普段より多いのか。

物は多そうだが、普段からこれだったら寄り付かなくなってたかもしれない「ぎゃあああああ！？」

「悲鳴！？」

「近いな……行ってみるか」

にわかになわつき始めた人混みをかき分け、俺とヒースは悲鳴がした方へ走り出す。

程無く悲鳴が上がったと思しき人集りに着き、周りが遠巻きに眺めているものを視認する。

男だ。特に出血しているようには見えないが、うつ伏せで倒れてピクリともしない。

「見えますか？」

「ああ、男が倒れてるな……ん？」

「……………」

背が低くて見えないのだろう、懸命に爪先立ちしているヒースに説明していて気付く。

あれは……さっきぶつかった男じゃないか？

いや、よく見ていた訳じゃないから確信は無いが。

「皆さんさがって、さがってください！」

騒ぎを聞き付けたのであろう、三人組の警備兵が人垣をかき分けて倒れた男に近づく。

簡素な鎧と剣で武装した二人の男が周囲の人間に声をかけ、倒れた男から離れさせる。

残った一人、なんとも場違いな白と黒の修道服に、頭にはベール

を被ったシスターが倒れた男の首筋や手首に触れている。

シスターは近づいた二人の男と何かを話すと、悲しげに小さく首を振る……おそらくは手遅れだったのだろう。

「……………」

ふいに周囲を見回しだしたシスター。

その視線がこちらで止まる。

……………いや、こちらではない。

俺が自意識過剰でないなら、俺のことを真っ直ぐに見つめている。

その視線が、何故かひどく居心地が悪い。

「ラギウスさん？どうしたんですか？」

「……………いや、別に。死んでるみたいだし、そろそろ行こう」

言い知れぬ不快感を振り払うように、俺達は足早にその場を離れるのだった。

第四話（前書き）

気付かれもせずに呪い殺された哀れなスリの男に合掌。
（人）チーン

第四話

「また無駄に広いな」

建物がデカいのは外から見ても分かったけどデカ過ぎだろ。三百人は入るぞ。

「僕も最初は驚きましたよ。でも混むときはここが一杯になるんですよ?」

マジか、全く想像できん。

周囲を見てみれば、ギルドに入ってすぐに案内所と書かれた受付があり、そこを左側に行くと登録や依頼の受諾・完了報告等を行う受付窓口と待ち合い席が、右側に行けば食堂を兼ねた休憩所がある。中はどちらも結構な人がいるし、広さに驚いたこと以外はヒースに聞いていた通りだ。

「僕は報告窓口に行ってきます。登録窓口は一番奥にありますよ」

「そっか、ありがとう。じゃあ行ってくるわ」

ヒースに礼を言って別れると、奥に向かう。

もっと荒れてるのを予想していたけど、中は清潔で職員も見た感

じじっかりしている。

まあ座っている冒険者達は含めないでの話だが。

一番奥の登録窓口はつと……………ああ、あれか。

「すみません、登録はここで良かったですか？」

「ええ、こちらで承りますよ。どうぞお掛けください」

そう言つて目付きの鋭い、いかにも『私仕事できます』って感じの、凛とした金髪の美人なお姉さんが微笑んで対応してくれた。

母さんで美人への免疫がついてなかったら、一目惚れくらいしてたかもしれない。

しかしまだ若いみたいなのに堂々としていて、なんとも風格がある。微笑んでいてこれなんだから、睨まれたらかなり怖そうだ。

よし、髪が長いわりに額には一房の髪が垂らされてるだけで、額のほとんどが丸見えなのでデコ姐ねえさんと呼ぼう。心の中で。あん？本人に言える訳ないだろ。絶対殺される。

デコ姐さんは読んでいた書類を横に置くと、もう一枚他の書類と羽ペンを取り出して俺の前に差し出す。

「ではこちらの書類にご記入をお願いします」

書類には名前、年齢、出身地の記入欄、他国のギルドに所属済みのチェック項目、冒険者が探索者かのチェック項目、戦士か魔法使いかの項目、戦士なら魔法が使えるかどうかのチェック項目等々、その後も幾つかの項目が並んでいる。

俺は出身地以外の記入欄と項目に書き込み、書類をデコ姐さんに手渡す。

「拝見いたします……ラギウス……ベルカント様？」

「はい」

「……………失礼ですが、本名ですか？」

怖っ！なんでいきなり睨まれてんの！？

「本名ですけど……なにか？」

「……………いえ、失礼致しました。私、当ギルドの副長を務めております、リーリエ・ハインガスト・バズワルドと申します」

どうぞリーリエとお呼びください、そう言って差し出された手を握る。

重い物など持った事も無さそうな細くしなやかな手は、見た目とは裏腹に力強く、修行で出来たのだろう固い剣だこの感触を返す。

しっかしこの若さで副長って、俺より少し上くらいにしか見えんのだが。しかもえらく御大層な名前を……もしかして貴族か？

うーん。正直な話、あんまり貴族には良い印象がない。

別に何かされたって訳じゃなくて、先生や師匠による教育の影響な訳だが。

「それでは当、冒険者ギルドの説明をさせて頂きますが、先にいくつかの確認をさせて頂きます。まず、出身地の欄が無記入なのは……？」

「すみません、出身地なんですけど、育ての親に拾われて森ん中の家で育てられたので……」

「森の中ですか。失礼ですが、どの辺りになりますか？」

「ここから南東に二日くらいです」

実際には一日半くらいで着いたが、まあ初めての一人旅で少しペースが早かったしな。

「……南東に二日くらいの森ですか？」

「はい」

「……そうですか」

なんで一々ピタツと止まったり、こっちをジツと睨むんだよデコ姐さん……。

「わかりました。それでは他国のギルドには所属しておらず、冒険者、戦士で魔法が使えるという事ですが、信仰の方は？」

「信仰？いえ、別に」

信仰とかギルドに関係あるのか？

特定の神を信仰してたらダメとか、依頼人から指定でもされたりするのだろうか？

「…特に信仰は無いと？」

「はい」

「でも魔法は使えると？」

「はあ」

でもって何だ。魔法と信仰なんて関係無いだろ。

まるで俺が嘘ついてるみたいじゃねえか。

「失礼ですが、魔法はどなたに教わりましたか？先ほどの育ての親にあたる方から？その方も信仰はしていませんでしたか？」

「……それが登録と何か関係あるんスか？」

だから何なんだよ本当に。

人ン家の事なんてどうでも良いだろ。それとも赤の他人のくせに、先生の教えにケチつける気か？

「……いえ、申し訳ありません。大変失礼いたしました」

あっさり引き下がって謝るくらいなら最初から聞くなよ。
そう口に出さなかった事を我ながら褒めてやりたいね。

「……… それではギルドの説明をさせて頂きます」

「連れがいるんで手短にお願いします」

「……… はい、申し訳ありません」

『本当にごめんなさい』 みたいなしよぼくれた顔を止めてもらいたいもんだ。

まるで俺が悪いみたいじゃねえか。

その後は特に何もなく（話が弾むはずもなく）、デコがギルドの説明をし、俺が無愛想に返事をするという光景がしばらく続くことになる。

粗方ヒースに聞いていた通りで、大きく違う点はない。

その中で聞いていなかった事が二つ。

一つはギルド内でのランクの事。

ギルドではランクという制度があり、冒険者は登録した直後はF、SSSのFランクと評価される。

そこから依頼をこなす事でランクが上がるのだが、各ランクは一つ上の、つまりFならEランクの依頼までしか受けられないらしい。当たり前だが、ランクが高いほど難易度や危険性が高く、報酬も高くなる。

ランクを上げたければ、依頼を受けて達成していけばギルドの判断でランクが上がるという。早い話が、依頼を沢山受けてれば自動的にランクが上がるって訳だ。

そしてもう一つ。むしろこっちが問題だ。

ギルドに所属する者は有事の際、滞在している街のギルドからの要請があった場合は戦闘に参加しなくてはならない、という点だ

相手が魔物だろうと人間だろうと、要請があれば断る事は許されないらしい。

……傭兵としてはお話にならないんじゃないか？

師匠は何を考えてギルドに所属するように言ったのだろう？

何か考えが有っての事なんだろうが……まあ除名依頼を出せばそついった義務も無くなる訳だが。

「以上が当ギルドの説明になりますが、何かご質問は？」

「特には」

「それでは、これにて説明と登録手続きは終了となるのですが、最後に試験の説明をさせて頂きます」

「試験？」

なんだそりや、聞いてないぞ？

「新規登録という事なので、冒険者として最低限の戦闘能力の持ち主かどうかだけ確認させていただく試験です。Fランクの中から簡単な依頼をギルド職員と共に受けて頂きます。もちろん試験でも報酬は出るのでご安心ください」

なるほど、言われてみれば納得だ。

一番簡単なランクもクリア出来ないようでは無駄死にするのがオチだろう。

「試験は早くて明日の午前からとなりますが、如何なさいますか？」

明日からか……まあ今日は宿も探さないといけないし、むしろ好都合だろう。

「じゃあ明日の午前でお願いします」

「わかりました。では明日の午前中なら何時でも構いませんので、もう一度この登録窓口までお越しく下さい」

そう言つてデコは俺の書類に何かを書き込む。

「……では、登録手続きはこれにて終了となります。明日の試験に備えて今日はゆっくりお休みになってください。本日はお疲れ様でした、明日のお越しをお待ちしております」

リリーエは遠ざかる少年の背中をじっと見詰め、見えなくなると

書類に目を落とす。

「……何者なのでしょうね」

つぶやいて書類の名前の欄を指でなぞり、先ほどの少年の顔を思い出す。

ベルカント。

その名を聞いて連想するものなど、大陸中の人間に訊いても一つしかない。

『ベルカントの傭兵隊』

ベルカントという名前の意味も、所属する人数も不明。戦場に現れるのは常に一人。

青年、中年、老人と若い女の中から誰か一人が現れる。故に四人ではないかと言われているが、実際は不明。しかしその実力は大陸中の誰もが知っている戦場の伝説、実在するおとぎ話だ。

突如出現した数万の魔物を一夜にして殲滅した青年。

生け贄を要求する魔神を殺した中年の男。

大地の神によって封印されていた巨大なドラゴンを葬った老人。

神々の中で最も強いといわれる戦の神の求愛にNoと言い、その軍勢を退けた女。

何かしらの神から力を授かった代行者ではないかと語る者もいるが、代行者ならば神でも殺せなかったドラゴンや戦の神の軍勢に勝てる筈がない。

そして一時は実在を疑われた事も有ったが、それには彼等を見たとする者が多過ぎた。

そんなベルカントの名を名乗り、南東の魔物が住み着いた森から来たという少年。

しかも神へ信仰も無しに魔法が使えるというのだから無茶苦茶だ。

この世界の人間でそんな話は聞いた事がないし、魔法を使う知性のある魔物ですら、何かしらの神や魔神を信仰している。

そんな真似が出来るとすれば、それこそ神か魔神くらいだ。

正直に言えば、嘘なのではないかと思った。イタズラにしても馬鹿馬鹿し過ぎる。

だが彼の持つ剣と鎧とペンダントが、その考えを許さなかった。

一言で言ってしまうと、あれは呪いだ。間違いなく呪われた装備だ。それもかなり凶悪な。

にも関わらず、少年は平然としている。呪われた物を三つも装備

しているのに。

「呪いの内容がわからないのが痛いですね」

戦闘中にしか発動しない類いの、例えば狂戦士化や生命力の吸収、もしくは普段から身体能力を低下させるような物の可能性もあるが、三つともその類いの物なんて事があるだろうか？

その可能性は、あまりにも低いように思える。

「試験は私が同行できるようにしなければ」

登録手続きに試験があるのが天の采配のようにすら思えた。彼が何者なのか、その一片くらいは分かるかもしれない。

迂闊にも初対面の印象を悪くしてしまった。明日は細心の注意を払う必要がある。

もし彼がベルカントの傭兵隊と関係が有るなら、事はこの街の、否、この国の存亡にすら関わりかねない。

場合によっては南東の森に関しても調べた方が良さそうだ。

ふと、リーリエは自分が興奮し、胸の高鳴りを抑えられないのに気付く。

期待と不安と喜び。

まるで初めて剣を持って魔物と対峙した時のようだ。

はて、と首を傾げる。

期待と不安はわかるが、喜びは何なのだろうか？

この興奮は何なのだろうか？

しばし考えて、ああ、と納得する。

「これが、憧れの存在に触れる気持ちですか」

つまり私は、ベルカントの傭兵隊を通して、ある意味彼に恋をしたという事ですか。

武骨者の私が、幼い頃に聞いたおとぎ話の英雄に恋をしたなどと、両親が知ったらどうなるでしょうね。

苦笑は一瞬。

後に残ったのは歡喜の笑みだった。

第四話（後書き）

主人公は初対面の相手や敬語を使うべき時には使える子です。

ただし親以外とは接した事がないので、あまり人付き合いが上手い訳でもないし、親バカに育てられたので少し短気な所も。

こうゆうのはちゃんとプロフィールや登場人物紹介のページを作るべきか……ふむ。

編集の仕方もちゃんと見なきゃ。

第五話（前書き）

風邪で寝込んでしまい、更新遅れました……申し訳ない。

第五話

「あー、ありましたねえ試験とか…」

「いやいやいや、ほんの少し前の事だろ」

お茶を飲みながら、ヒースが遠くを見るような目になって吐息と共に言葉を漏らす。

登録手続きを終えた俺は、待ち合い席で待っていたヒースと合流し、そのままギルドにある休憩所兼食堂に向かう事にした。

特に約束していた訳でもないのに待つ必要は無かった筈なのだが、依頼の完了報告と報酬の受け取りを済ませたヒースは、律儀に俺の手続きが終わるのを待っていてくれたのだ。可愛い奴め。なでなで

ちなみに今は遅めの昼食として、本日のオススメランチが来るのを待っている所だ。

「いやあ…ホント大変だったんですよえ、あの時……」

ヒース曰く、それは一ヶ月前の事。

自分を含め五人の試験参加者とギルド職員でFランクの依頼に挑

んだ時の事だ。

依頼は歩いて半日程の森（俺とヒースが出会った所の近くらしい）の中の川に生息しているリバーサラマンダーを討伐し、死骸を持ち帰ってほしいというものだった。

ちなみにリバーサラマンダーというのは1メートル前後ののつぺりした茶色のトカゲの一種であり、普段は川や湿った洞窟の中なんかにいる大人しい生き物だ。

武器さえあれば子供でも勝てるし、肉は美味しいし乾燥させて磨り潰せば滋養強壯の薬にもなるという、引く手あまたの獲物である。

難易度も危険性もFランクらしく低いものだったのだが、そう侮ったのが間違いだった。

弱くて美味くて薬にもなる。

そんなあらゆる意味で美味しいリバーサラマンダーが絶滅しない理由は繁殖力に有る。

だいたい三ヶ月に一度の周期の産卵で一匹のリバーサラマンダーが三十匹前後の子供を産み、子供は二ヶ月で成体となる。

つまり増えるのだ。それも爆発的に。

もちろん個体としては弱いので、森の中他の動物や魔物に捕食されるので生態系が崩れたりして問題になった事は無い。

そんなリバーサラマンダーを狩るにあたって、一つ気を付けなくてはならない注意点がある。

リバーサラマンダーを狩る時は、子供には手を出してはならない。

それを知らなかった試験参加者の一人が、まだ孵ったばかりのリバーサラマンダーを遊びで踏み潰したのだ。

子供が踏み潰されるのを見た親は、甲高い鳴き声をあげて他の親達に危険を知らせた。

その結果、親達は子供達を呑み込んで体内に隠し、川の深い所や洞窟に逃げ込み、辺り一帯からリバーサラマンダーが姿を消してしまった。

さらにリバーサラマンダーを狙ってきた空腹の野犬の群れや魔物に出くわし、気付いた時には囲まれて三日三晩のサバイバルを過ごす事になったのである。

幸い緊急の依頼ではなかったのだから達成できたらしいが、もし急ぎの依頼だったら試験は不合格になっていただろう。

「もうホント、何度死ぬかと思った事か」

「まあ災難だったなとしか言い様がないが……そういう特殊なケースを除けば、基本的には試験は簡単な依頼になるんだろ？」

「そうですね、試験で不合格になる人はそうそう居ないって聞いた覚えがあります」

リバーサラマンダーの子供を踏み潰した人は不合格になりましたけどね、とヒースが黒く笑った。

ちり。

突然だが、保存食というのは名前の通り保存が利く食べ物である。大体は塩漬けだったり干して乾燥させてたり燻製されてたりする。物によっては嗜好品だったり、生の時とは違う味や風味を楽しめる物もあるが、基本的には固かったりしょっぱかったりして美味しくない。

だから昨日の朝食以降は保存食で済ませていた俺にとって、この遅めの昼食は非常に待ち遠しいまともな食事だったのだ。

だっ
たの
だが
……。

小さく切った野菜が入った妙に味が薄いスープ。独特の臭みのある豚肉のサイコロステーキ。初めて食べるガチガチのパン。

…ビツクリした。

あえてもう一度言わせてもらおう。
ビックリした！

まさか保存食と同等としかいえないような料理が出てくるとは……
 がっかりである。

試しにここの料理はいつもこんな感じなのかヒースに訊いてみたが、メニューは違えど質に関しては大した違いは無いようだ。

俺の質問に首を傾げていたし、質問の意図がわからないのだろう。つまりこれがこの食堂での日常的な料理という事になる。

まさにカルチャーショックである。

よもや家を出て二日目の昼に家に帰りたくなるとは思わなかった。さすがに普段食べてる人の前で貶したりする気は無いし、少ししか食べないで残すのも気が引けるので食べはするが…。

マスターの料理が恋しい。

『私もラギさんが恋しいですぞ』

.....。
.....。
.....。

幻聴が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

あと何故か懷にしまっておいた筈の、神像を入れた布袋が床に落ちてガシャッと音を立てたが、気にしない事にした。

『具体的にはお風呂あがりの上気した顔とか寝起きの眠そうな顔とか美味しそに御飯を食べる顔とか寝顔とか寝顔とか寝顔寝顔寝顔寝顔ハアハア寝顔ねがぐふうッ!？』

……けぶ。

吐きそうだ。あと最後のは何があった。

……いや、気のせいだろう。

これからは顔を隠して寝るか、うつ伏せで寝る事を考えた方が良
いかもしれない。

食後に一つの問題に気が付いた。

物価がわからないのだ。子供の頃に俺がお客さん役で、先生が
説明役、母さん達三人が店員役として買い物の練習はしたが、実際
に買い物をした事がない。

この世界の通貨はガルド。

一番安い硬貨が固いフルルゴ貝の殻を使った人間の目と同じくら
いの大きさの貝貨で、銅貨がその十倍、同じ厚さで太さ長さが小指
くらいの四角い銅板がさらにその十倍。

その後は銀、金、金板百枚で竜の鱗を使った竜貨となる。

簡単に表にすると、

竜貨 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0

金板 1 0 0 0 0 0 0 0

金貨 1 0 0 0 0 0 0

銀板 1 0 0 0 0 0

銀貨 1 0 0 0

銅板 1 0 0

銅貨 1 0

貝貨1

こうなる訳だ。

ちなみにズボンのポケットには竜貨が一枚、金板が二枚、金貨が二枚、銀板が二枚、銀貨が二枚、銅板が二枚。

つまり俺の所持金は102222200ガルドとなる。

俺はヒースに待っていてくれた礼に払わせてくれと言い、店員にこれで足りるかと銅板を一枚渡した。

お釣りは銅貨九枚だったので、今の食事で一人前貝貨五枚という事か。

……………もしかして小遣いが多すぎるのか？

第六話

「ごめんねえ、今日はもう満室なんだよお」

「……そうですか、わかりました。」

恰幅の良い受付のおばちゃんに礼を言って宿屋を出る。

すでに空は夕焼けの赤に染まり、人通りは疎らで、まるで昼間の喧騒が嘘のようだ。

「まいったな」

途方に暮れて、思わずため息を吐く。

昼食の後、俺達はヒースが宿泊していた宿屋に向かったのだが、今日の昼前になって突然大勢の客が訪れて満室になったのを聞き、大急ぎで泊まる所を探す事になったのだ。

ヒースはヒースで、今日で料金の先払いによる契約が終わるのはわかっていたのだが、ここまで突然人が増えるとは思ってなかった。なので普通に泊まれるものと思っていたらしい。

昼のお祭り騒ぎの時に気付くべきだったのだろうが、俺もヒースも旅に馴れていない弊害がモロに出してしまった。楽天的過ぎたと言わざるを得ない。

「これで九軒目か……こりゃ素直に野宿かねえ」

「すみません、僕が気付いてれば……」

「だから謝るなって。それは俺も同じだし、今さら気にしても仕方ないだろ？」

ヒースは五軒目を過ぎた辺りからずっとこんなだ。責任なんか感じる必要も無いのに謝りっぱなしで、逆にこっちが悪い事してるみたいだ。

助けた時の礼の言われようもそうだし、何かと気にして重く受け取ってしまうのかもしれない。

「すみません……」

だから謝るなってのに。どうしたもんかねえ。

しかし真面目な話、このままだと野宿だ。野宿自体は昨日もしているが、やはり明日の試験の事を考えると休んでおきたい。

もう近場にあるという宿屋は全部見たし、他の宿屋は離れたら所にある。今から行っても厳しいだろうし………ん？

「ヒース見ろ！メイドさんだ、メイドさんがいるぞ！？」

「め、メイドさん？」

長袖のエプロンドレスに、名前は知らないが頭にはヒラヒラが付いたカチューシャ。これがメイドさんでなくて何だというのか！

「すげえ、俺メイドさんって初めて見たぜ！本当に実在するんだな！？」

掃除洗濯炊事子守夜伽戦闘まで完璧にこなすエリート女戦士……まさかこんな所でマスターと同等の存在と出会えるとは！

マスターも普段はちよつとアレだけど、俺の訓練に付き合ってくれる時はメチャクチャ強いし、やっぱり俺なんか相手にならないくらい強いのだろうか？

「この街にも貴族は住んでるし、ちよくちよく見掛けますよ？」

「マジかよ……」

山より巨大なドラゴンを一人で倒して来たとかホラ吹いてやがった時もあったが、少なくともマスターは俺よりは桁違いに強いのは確かだ。

そんなマスターと同等レベルのメイドが何人もいるのか？

恐ろしい、なんて恐ろしい街なんだ、ネフロは。

「あの人に他の宿屋を知らない訊いてみませんか？」

「め、メイドさんにか？」

そんな気軽に話し掛けて大丈夫なのか？

万が一、機嫌を損ねたりしたらミンチより酷い事になるんじゃない……

…。

「すみませ〜ん、ちょっと良いですか？」

うわもう話し掛けてるし！？

っーか俺を置いていくな！

「リコリスに何か御用でしょうか」

メイドさん……茶色の髪をショートカットで揃えた、人形のように無表情の少女は、実に冷たい抑揚など皆無の声でそう言った。

リコリスというのは彼女の名前だろうか？

すつきりした顔立ちに意思の強そうな、それでいて何処か違う所を見ているような不思議な瞳が印象的だ。

歳は俺達と同じくらいに見えるが、その冷たげな表情もあって少し年上にも見える。

可愛いと言うよりは綺麗という感じが……しかしこんな俺達とたいして変わらないような女の子が、マスター並に強いというのだろうか？

俺だつて幼い頃から師匠にしごかれたり、母さん達に各々の戦い方を教わったはずなんだが。

……もしかして俺ってクソ弱い？……………ああ、だから神像くれたのね……鬱だ。

「この辺りで、まだ部屋が空いてそんな宿屋って知りませんか？」

「回答不能です」

「え？」

「この街の情報は入力済みですが、現在の宿屋の宿泊状況は未入力です。現在のリコリスでは回答は不可能と判断します」

「は、はあ、えっと……」

よくわからない言い回しにヒースが困った顔でこちらを見る。
うん、俺もよくわからん。っていうか、

「もしかしてアース・ヒューマン？」

メイド服から出ている手首が、色こそ肌と同じ色だが人形のような球体関節だ。

「アース・ヒューマンって、何ですか？」

アース・ヒューマンというのは大地の神、ガイアラナスによって創られたとされる種族だ。

見た目は人間に近いが関節が人形のような球体関節で、人間とゴレムの中間の種族とされている。

非常に数が少ない種族でまだまだ謎が多いらしい。俺に教えてくれた先生も知識だけで、実際に見たことは無いらしい。

「はい、リコリスはアース・ヒューマンです」

「アース・ヒューマンは身体能力が高い上に、大地の神から強い祝福を受けてるって話だし、メイドさんになれるのも頷けるな」

うむ、種族的なアドバンテージが有るってんなら納得だ。俺がクソ弱い訳じゃない。

「……あの、強いのとメイドさんとの関係が？」

「知らないのかヒース、メイドさんは何でもできて、さらにドラゴンを倒せるくらい強くないとダメなんだ」

「……あれ？なんかメイドさんの定義に齟齬が生じてます？」

何故かヒースがそう言って首を捻る。

「リコリスはメイドではありません」

え。

「メイドさんじゃないのか？」

「はい」

「じゃあなんでメイドさんみたいな服着てるんですか？」

「ガイアラナス様に頂きました。これを着てネフロに向かうように」と

「向かうようにって、何のために？」

「不明です。ガイアラナス様はご多忙です。リコリス達にそのお考えを説明される事はありません」

「説明も無しって……着いてから新しい指示が来たのか？」

「いいえ。ガイアラナス様はご多忙です。指示の後の行動はリコリス達に一任されています」

なに考えてんだ神様。理由も教えないで行かせておいて、何をさせたいのかも教えないなんて。

「じゃありコリスさんは何をすれば良いとか、何を探せば良いとか、なにもわからないんですか？」

「はい、不明です。行動は全てリコリス達に一任されています」

「それって大変なんじゃないか？」

「質問の意味が不明です。大変の意味を説明願います」

「疲れないかとか、面倒じゃないかって事だ」

「リコリス達は疲れを感じる事はありません。面倒と感じる事はありません」

……………。

こういう言い方はしたくないが、なんと云つか疲れるな、このメイドさん。話し方に抑揚が無いからか、丁寧過ぎるからか。

あ、メイドさんじゃないのか。

「じゃあその、探し物か何かはわからないけど、とにかくそれがみつからなかったらどうするんだ？」

「みつからないなどという事はありえません。みつかるまで探し続けます。リコリス達にはそれが可能です」

「みつかるまでって、そんな……」

ずいぶん献身的というか狂信的というか……いや、その手のやつとはまた別物か。使命感か？

いや、それが当然と考えてるなら使命感とも違うな。

つまり彼女らにとっては、それが普通なんだろう。

なら関係無い人間が口を挟む問題じゃない。他の種族の文化と受け入れるべきだ。

「……そっか。まあいいや、じゃあ俺達行くから頑張れよ」

「はい、ありがとうございます」

「え、あの、ラギウスさん？」

「いいから行くぞ」

俺は何か言いたげなヒースの手を掴み、有無を言わずそのまま

メイドさん……リコリスから離れた。

「もう暗くなっちまったし、アイツはアイツの探し物がある。お前がどう思おうと、アイツにはそれが普通なんだ。他人が口を挟む事じゃない」

「で、でも、あんなの……」

「可哀想、なんて言うなよ？ そんな同情は失礼ってもんだ。アイツはそんな事で怒らないだろうけど、言うべきじゃない。」

「……………」

「アイツにとっては当然の事で、やるべき事なんだ。本人が決める事を、それを否定するような言い方はやめとけ」

「……よくわかりません」

「がつつり関わって、そいつの生き方に責任を持てるんじゃない限り、人の生き方に干渉するべきじゃないって事だ」

もし仮に、善人面して俺に『人を殺してお金を貰う傭兵になんてなっちやいけない』なんて言う奴がいたら、俺はきつと許さない。

相手の境遇も気持ちも知らない人間が踏み込んで良い領域じゃない。

もし俺に傭兵になると言って良い奴がいるなら、それはあの四

人だけだ。

よーするに。

「否定しないで、頑張れって応援してやればいいと思うぞ」

それだけの話だ。

第七話

「や、やっぱりやめましょうよ……こんな所無理ですよ」

「堂々としてろつて。逆に不振がられるぞ?」

「そんな無茶な……」

「いいから行くぞ」

「あ、あう」

俺はキョドってるヒースに苦笑しつつ、鏡のように磨かれた大理石の床を進んだ。

あれから何人かの通行人に訊いて何軒かの宿屋を回ったが、結局どこも満室で泊まれる所は無かった。

そして最後に残った宿屋にたどり着いたのだが……。

一言で言えば、それは城だった。

先生に見せてもらった本に載っているのより少し小さいが、それでも周りの建物より数段大きく、見るものを充分に威圧する佇まいの小城。

門をくぐり、噴水のある庭を歩けば貴族らしき身なりの良い男女

がちらほらと姿を見せ、明らかに冒険者という俺達の外見を見ては眉をしかめる。

門を見た時点でわかったし確認するまでも無かったが、お貴族様御用達の宿だったのだろう。

よりよって最後がお貴族様のための宿とは……こりゃ野宿かねえ。やれやれだ。

最初に目についたのはその広さだった。

普通の宿屋の数倍はあるであろうホールにフロントがあり、磨き抜かれた大理石の床が、驚くほど高い天井から吊るされた光り輝く巨大なシャンデリアの灯りを反射している。

視覚を楽しませるためであるう純白の柱や調度品は貴族ではない俺から見ても洗練され、格の高さを窺わせる。

「いらつしゃいませ、ローゼンガーデンへようこそ」

それはフロントに向かって歩きだしてすぐの事。

タキシード姿の品の良い老紳士が話し掛けてきた。

長めの白髪を後ろで結び、口髭をたくわえて穏やかに微笑む老紳士。

なんとなくだが、真面目に家の仕事をしている時のマスターに雰囲気似ているような気がする。

「まだ部屋は空いてますか？」

「はい、まだ空いているお部屋はございますが……」

ちらりと、老紳士はさりげなくヒースと俺を見て言葉を区切る。

「シングルのお部屋は満室でございまして、ツインのお部屋が一室
だけしか空いていない状態でございますので……ご一緒に宜しかっ
たですか？それに些かお値段の方が……」

「あー……」

宿泊拒否されなかったのも、ここまで丁寧に対応されたのも予想
外だったが、その可能性があったか。

金はなんとかなると思うが。

どうしたものか……うん、仕方ない。

「ヒース、仕方ないからお前だけ泊まれ。俺は野宿で良い」

「はあ！？　む、無理ですよ！こんな凄い所に一人で泊まるなん
て！？」

「仕方ないだろ、二人部屋しか空いてないんだから。金ならなんと
かなる」

「いやいやいや、意味わかりませんよ！？　二人で泊まれば良いじ
やないですか！？」

「いやいやいや、お前こそわかってんのか？今日出会った人間と同
じ部屋で眠るなんて、命が幾つあっても足りないぞ」

師匠の受け売りだが、金をケチったり相手を簡単に信用して同じ
部屋で寝たりして、身ぐるみ剥がされたり殺されるなんて日常茶飯
事らしい。

そうでなくても俺は男でヒースは女なんだ。しかも超可愛い。
とても理性がもたん。

「大丈夫です！僕はラギウスさんを信じてます！」

「いや、だから人を簡単に信用しないように言ってるんだが……………」

「信じてるんです！　ラギウスさんは僕を信じてくれないんですか
！？」

うわぁ、じつとこっちを見つめて、その言い方は卑怯だろ…………。

「……………もしかしたら俺は悪人かもしれないし、どうなるかわか
らんぞ？」

「……………いいんです。ラギウスさんは僕の命の恩人なんですから」

じつと俺を見つめるヒースの瞳から、俺は目を逸らせなくなる。
その瞳の輝きに、汚れを知らぬその無垢な眼差しに、何故か引き
寄せられる。

……………ああ、なるほど。

とかく重く受け取るところが有るとは思ってたが、ここまでとは。
こいつは本当に損な性格だな。

重症だな。手に負えない。完全に手遅れだ。
だから。

「すみません、その部屋でお願いします」

短い間だが、一緒にいる間くらいは守ってやりたいな、と思った。

そんなこんなで、老紳士と違ってじろじろと俺達を見る受付の男の慇懃無礼な口を、ドヤ顔で告げられた2000000ガルド……金貨二枚できつちり黙らせると、手荷物を持つてくれるというのを断り、俺達は老紳士に案内されて部屋に向かった。

「
……………」

絶句した。

「お気に召して頂けたでしょうか？」

お気に召すとか召さないとかいう問題じゃない。

たった二人で泊まる部屋なのにギルドの食堂より広いとか、絶対間違ってる。というか、ソファーはともかくバーや遊戯台がある

しかもベッドが無いってことは、さらに奥に部屋が有るって事か？
どうかしてるぞ本当に。

「……ああ、じゃあ部屋でお願いします」

そう言つて差し出されたカラフルな紙のチケットを受け取るが、正直頭が追い付かない。

いや、ちよつと待てよ。

昼食代10ガルド。

竜貨	1	0	0	0	0	0	0	0
金板	1	0	0	0	0	0	0	0
金貨	1	0	0	0	0	0	0	0
銀板	1	0	0	0	0	0	0	0

銀貨 1000
銅板 100
銅貨 10
貝貨 1

二万倍って事が。そりゃ立派にもなるわ。
うん、納得。

……………。

……………？

……………！？

いやいやいや、おかしいだろ！？

受付の男がムカついたから簡単に払っちゃったけど、バカ高いだ
ろ！？

一泊だけで幾ら取るんだよ！？

いくら町に来るのが初めてで物価や相場がわからないって言った
って、さすがにクソ高いのはわかるぞ。

もう払っちゃったしどうにもならないけど、ぼったくられてるだ
ろ絶対……………。

「御用の際は寢室に置いてある呼び鈴でいつでもお呼びください…
…このお部屋にお泊まりになるのは、王室の方々に続いてラギウス
様とヒース様で…………三組目でございますか。どうぞ、ごゆるりと寛

ぎ下さい
「

……貴族じゃなくて王室御用達なん？

第七話（後書き）

うーん、当初の予定より戦闘描写まで行くのに手間取っております。
一番書きたかったところまでもう少しなんですけどねえ。

あ、丁寧な言葉遣いとかわからないし、誤字脱字があったら教えてください。

第八話

「はんはひっひよおふんふおふええふあくひふあひふんへふふえ」

「わからんから飲み込んでから言ってくれ」

頬をぱんぱんにして焼き菓子を頬張るヒースの顔を見て、思わず微笑する。

くっそう可愛いなあ。

ウェイターが淹れた花のような香りのする熱いお茶を啜り、その渋みに眉をしかめて焼き菓子を一口かじると、濃厚な卵と牛乳の風味と甘味がお茶の渋みを打ち消してくれた。

……確かクッキーといったか、これは皆への土産に後で貰っていた。
こっ。

家で見た事がないが、マスターは作れないのだろうか？

「なんかもう、一生分の贅沢しちゃったような気がします」

四皿目になる小さなバスケットに入った焼き菓子を頬張り、嚙下したヒースの呟きに苦笑しつつ、ナプキンで粉塗れるになっていた口元を拭ってやると、俺は手を挙げてウェイターを呼んだ。

「すみません、クッキーとお茶のおかわりを。あとケーキってありますか？」

あの後、食事は部屋に運んでもらったのだが、それで正解だったと思う。

ヒースは貴族が食事を摂るような店でのマナーは知らなかったし、ワゴンで運ばれてきた料理を食べる度に目を白黒させて大騒ぎして
いては、レストランから叩き出されていたかもしれない。

ナイフやフォーク、スプーンなんかは外側から使う等の最低限の
マナーだけ教えたが、格式張ったレストランではきつと緊張して味
なんか分からなかっただろう……まあ、それは俺も同じだが。

ただでさえ凄い部屋に緊張してるんだから、食事くらいは気楽に
楽しむべきだろう。

料理自体はマスターの料理にも負けないレベルで、存分に堪能で
きた。

あと金とマナーの事で貴族なんじゃないかと思われたようだが、
しつかり否定しておいた。

ちなみに食事を待つ間に鎧を脱いで楽な格好になると、部屋を探
検してみようという事になった。

最初に入ったホールのような部屋とは別に、十人は眠れそうなベ
ッドが二つある寝室、無駄に広いトイレが三つ、団体客用にしか見
えないデカい風呂が二つ、なんの為にあるのかわからない部屋が三
つ、カードゲーム用のテーブル等が鎮座するプレイルームが一つ、
そしてパーティーができそうなテラスという間取りだった。

こんだけ部屋が有るのになんで寝室を二つにしなかったのか全く理解できない。

「つか絶対二人用の部屋じゃないと思う。部屋の中に階段があつて二階建てになってるってどうなってんだ。」

それに部屋の装飾品なんかを盗んだら、それだけで一財産築けそうだ………と思ったら、何気に盗難防止用の魔法が使われていた。残念。

さらに一つ判明したのだが、普通の宿屋には風呂なんて無いらしい。有料で大きめの桶を借りて、その中にお湯を入れて身体を拭いたりするらしい。

一応大きめの桶なら中に入ることも出来るらしいが、そんなんで疲れがとれるのだろうか？

そして食事の後、ドデカイ風呂に飛び込みたい欲求に駆られたが、そのまま寝てしまいそうだと思つた俺達は呼び鈴で人を呼び、念のため剣と金と神像を持ってカフェに案内してもらつたという訳だ。

が。

案の定、案内されたのは普通のカフェじゃなかった。

黒い大理石の床と、純白の壁、天井、柱。

壁には何かしらの神の絵と思しき絵画が無数に飾られ、蠟燭の灯りで妖しく照らされている。

そしてそれだけなら不気味だったかもしれないが、部屋の奥にあるステンドグラスによって、神々しいとすら思えるようされていた。

創造神バルケルス。

かつてこの世界を創造したとされる、最も偉大なる神。

その創造神をモチーフにしたステンドグラスは、たとえ創造神を知らぬ者であっても目を釘付けにするような、一種の魔法のような迫力があつた。

もし俺が神という存在に対して、もっと信仰が深かったなら、あのステンドグラスの前で跪いていたかもしれない。

この世界には神が実在する。

滅多に人に姿を見せる事はないが、信心深い者や寵愛する者には稀に神託を授け、力を与えるという。

その為、戦士や騎士、兵士等は戦の神を。

医者や薬師は癒しの神を。

農民や漁師は豊穡の神や海の神を。

商人や冒険者は商売の神や繁栄の神、守護者の神や旅の神を信仰する。

信仰は自由だし、地方の土着神や神の眷属の神なんかも無数にいて切りが無い。

そしてそれぞれの神に神殿があり、昼間見たようなシスターも、どの神殿のシスターかは、少なくとも俺には見ただけでは分からない。

そんな中で有史以来、一度も神託を受けた事も無く、姿を見せた事も無いと謂われているにも関わらず、最も多くの人々に信仰され、最も多くの神殿があるのが創造神だ。

曰く、この世界がある事が、自分達が生きている事自体が、創造神のお陰なんだそう。

俺にしてみれば、そんな本当に存在するのも分からない神を崇める気にはなれないが、他の神が『創造神は存在する』と言ったらしいので、いる事はいるのだろう。

で、そんな有り難いステンドグラスや絵画を鑑賞しながらお茶とお菓子を堪能してるって訳だ。

「俺個人としては特定の神様を信仰してないんだが、信仰してる人間にはどんな感じなんだろうな、この空間は」

「どう、ですかね。僕も信仰してないけど、なんだか少し不思議な気分ですし」

どうやらヒースも俺と同じ気分らしい。

このカフェに入った時から視線を感じるような不思議な感覚がしたが、それが決して不快ではない。

他に客がいない事もあるんだろうが、この空間全体が静寂で満たされ、僅かな会話意外は許されないような、侵してはならない聖域のようにすら感じる。

いや、感じるのではなく、実際に神聖な聖域なのだろう。少なくともそう感じさせる何かが、この空間にはある。

「無駄に広い部屋はともかく、このカフェなら高い金を払う価値がありそうだな」

俺はそう言っ、クッキーをもう一口に放り込んだ。

「如何でしょう、楽しんで頂けていますでしょうか？」

ヒースがトイレに立ち、一人でステンドグラスを観ながらお茶を飲んでると、いつからそこに居たのか、例の老紳士がテーブルの脇に佇んでいた。

気配など微塵も無かった。驚きを顔に出さないようにしたつもりだが、出来ているだろうか？

「ええ、とても。こんな不思議な感覚は初めてです」

「ありがとうございます、私^{わたくし}自慢のカフェを気に入って頂けたなら、これ程光栄な事はございません」

私自慢の、ね。

「失礼ですが、貴方は？」

俺の問い掛けに一瞬だけ目を少しだけ見開くと、彼は本当に愉快そうに笑い、一礼する。

「申し遅れました。私、このローゼンガーデンのオーナー、ハイデ
ンライク・シュトレグスと申します。どうぞお見知り置きを」

オーナー……それなりの立場の人間だろうとは思っていたが、まさかトップだったとは。

「成る程、オーナーの方でしたか……一つだけお訊きしても宜しい
ですか？」

「はい、何なりと」

「どうして僕達を泊めてくれたんですか？ どう見ても貴族の類い
には見えなかった筈ですが？」

俺が騙されたりぼったくられていないのを前提として、ここが
本当に王族や貴族が利用するような施設だとすれば、宿という意味
では間違いなくトップクラスだろう。にも関わらず、どうして俺達
みたいな冒険者を客として受け入れたのか。

普通なら門前払いか、つまみ出されるのがいい所だろう。

「代行者の方であれば、王族や貴族の方と同等か、それ以上の御持て成しをさせて頂くのは当然の事でございます」

「だいこうしゃ？」

知らない、聞いた事の無い言葉だ。

「はて、ご存知ありませんか？」

「ええ、良ければ教えてもらえますか？」

「畏まりました、僭越ながらご説明させていただきます」
そう言つて老紳士、ハイデンライク氏はこほんと咳払いを一つ。

「一言で言つてしまえば、代行者というのはその名の通り、神の代ト行者ジェントとしての役割を、神に認められた者の事です」

「代行者としての役割？」

「はい。戦の神なら戦、戦いを。癒しの神なら傷付いた者を治療し、癒す事を。各々の神が必ず何かの役割を持っているのはご存知ですね？」

「はい」

まあそつでなきや??の神なんて呼ばれないだろう。

「その役割を果たすにあつて、神の代行として神の役割の手伝いを任された者を代行者と呼びます。戦の神の代行者なら戦に赴き、

癒しの神の代行者なら人々を癒す。それが代行者です」

「つまり自分が信仰する神様の仕事を手伝うと？」

「はい。もちろん滅多に代行者として認められる者はいませんし、神に授けられた力は絶大といわれ、神殿によつては代行者を半ば神そのものと見る神殿もありますな」

「人間を神として見るんですか？」

「はい、それだけの力が有るという事でしょうな。噂によれば昔、戦の神の代理人は国同士の戦争に神殿ごと介入して双方を滅ぼしたり、癒しの神の神殿にいる代行者の一人は、幼い頃に寵愛を受けたので子供のまま成長せず、癒しの巫女と呼ばれて生き神として扱われているとか」

やりたい放題だなおい。

それに癒しの巫女って、幼い子供本人がちゃんと全部理解して、望んでなったのか？

そうでないなら寵愛だの祝福だのと言っても、呪いと変わらない気がする。

……ん？

子供のまま成長せず？

「あの、癒しの巫女が子供のまま成長しないって、つまり」

「はい。各々の神につき一人、最も強い寵愛や祝福を受けた代行者

は不老といわれています」

マジかよ……。

それって本当に人間じゃなくなつて、神になるって事じゃねえか。

「ですので、過去に大勢の王族や貴族が持てる財を尽くし、代行者となろうとしたとされていますが、金や権力で成功したという話は聞いた事がありません。逆に代行者の命を狙うのも、神と神殿を丸ごと敵に回す事になるので、近年では聞きません」

つまり昔はあつたわけだ。

まあ金持ちが不老不死を求めるのはよくある事らしいしな。

「代行者についてはよく解りました。ちなみに今の話は普通に誰でも知ってる事ですか？」

「小さな子供とかでなければ、基本的には誰でも知っているかと」

つまり一般常識ということか。

こういった話なら先生辺りが教えてくれそうなんんだが……
何か考えが有ったのだろうか？

そして残念ながら、確かな事が一つ。

「説明してもらつておいて申し訳ないんですが、僕は代行者なんて御大層なもんじゃありませんよ？」

期待を裏切って悪いが、ハイデンライク氏の勘違いだろう。
神の寵愛も祝福も知らないし、特定の神を信仰してすらいない。
それでも俺を代行者にしようなんて神様がいたら、よっぽどの物
好きだろう。

「はて、そんな事はないと思うのですが……ああ、そうそう。代行者の話で忘れていた事が一つ」

どこか芝居がかった口調と仕草で、ハイデンライク氏が人差し指を立てる。

「神像をお持ちではありませんか？」

……なに？

「代行者は『代行者の神像』と呼ばれる神器を通じて、神の力を振るうそうですよ？」

だいこうしや。

だいこうしやのしんぞう。

『どうぞ、手に取ってみてください』

「……………」

思い出した。

どうして忘れていたのか。

初めて聞く言葉なんかじゃない。

あの時、マスターがハッキリと言っていたじゃないか。

『代行者の神像と呼ばれるものです』

と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8081x/>

傭兵の代行者

2011年11月4日09時03分発行